

# べっふの文化財

No. 43

平成25年3月

## － 浜脇薬師祭りの見立て細工 －



## 目 次

「見立細工と浜脇薬師祭り」 入江秀利（別府市文化財保護審議会委員）……………	1
「別府浜脇の薬師祭りと県内に伝わる見立て細工」 小玉洋美（別府市文化財保護審議会委員）……………	7
「造物趣向種について」 外山健一（別府市文化財保護審議会委員）……………	13
「造物趣向種式編下の読み下し」 入江秀利（別府市文化財保護審議会委員）……………	14

【口絵 浜脇薬師祭りの見立て細工】

## 「見立細工と浜脇薬師祭り」

入江秀利(別府市文化財保護審議会委員)

### 浜脇村の環境

江戸時代初期の村落は『横灘人畜御改帳(元和八年：1622)』によると、別府村、石垣村、浜脇村、小野小平村(枝郷)の4ヶ村であった。

横灘は別府村の堀助之丞を総庄屋とする手永で、男女401人・74世帯(農家以外5世帯)の別府村が最も大きく、次の浜脇村は296人・63世帯であった。因みに同「人畜御改帳」によると、農家の世帯主は、庄屋・親百姓・小百姓で、家族には親・女房・男子・女子がおり、名子・下人・下女を使用する世帯もあった。浜脇村では農家以外に一向宗寺1・水主2・鍛冶2・鉢開1世帯があった。

※石垣村 293人 小野小平村 33人

### 浜脇延享古絵図



延享三年(1746) 朝見川々口に中州があり、崇福寺・長覚寺、住吉神社、朝見神社御旅所(松原浜)が見える。

177年後、横灘が嶋原藩松平氏の御預所になった寛政十一年(1799)の村明細帳をみると、

浜脇村 庄屋荒金八郎右衛門倅 組頭十人

崇福寺 松音寺 長覚寺 法花寺

汐湯二所

別府村 庄屋高倉策左衛門 組頭十二人

萬松寺極楽庵 西法寺(一向) 海門寺

出湯十八所 砂湯 滝湯 石風呂

とあり、村別の人口は書きいれてないが、組頭

の数から推して人口や世帯数が増加している。

浜脇村の汐湯は排水口が海につながっているため大潮の時は海水が逆流して、半時足らずのあいだ湯坪を沈めたが、潮が引くと入浴はできた。

別府村の出湯は殆ど流川沿いで、同村南部から浜脇村にかけて散在していた。

文久二年(1862)の『流川下繁昌二付…』の絵図に「…大造家作り本通浜迄両側共に町ニ相成候…」とある。別府村には屋号のある旅籠が軒を連ねるようになった。一方、浜脇村は湯薬師佛への信仰が盛んで、東・西湯と薬師湯・砂湯を囲む民家の中には、賄い抜きで宿泊させる木賃宿を営む者も多くなった。農閑期には多くの農民が入湯に押し寄せた。近郷からは漁船に乗り会い、夜は港に結やって宿泊する「湯治船」も現れた。

慶応四年(1868)、御預所が熊本藩になると、別府・浜脇・田野口3ヶ村が代官役所に出した『御伺書』に、江戸時代末に別府・浜脇村が繁昌したありさまを伺うことができる。

3ヶ村には「…さいわい温泉これあり、殊に海浜船着の便もよろしく候て、春秋自他の入湯夥だしく一年中積もり立て候えばおよそ拾万人に及び候程の群集にて…」と入湯客が年間10万人にも及ぶ程であった。

住民達は「…その蔭を持って渡世仕来たり、小商、走り使いの者も湯治人あてにて渡世仕候」煮売屋(総菜屋)や居酒屋などの小商いで生計を立てるものもあった。入湯客の客寄せのために、朝見八幡の旅所の松原浜では「…例年歌舞伎芝居・見世物・角力など興業」も催したと書かれている。

嘉永三年(1850)の『当用心得』には隣村から、「…芝居賑わいの場所へ遊女体の者入り込み…」と風紀の紊乱を訴えられるなど、湯治場は享楽の地となっていた。

薬師祭の素地ができていた。

## 浜脇の祭

浜脇は祭りの盛んな村で、八月の下旬には八幡朝見神社・秋葉神社(浜脇)、住吉神社、薬師如来の祭が目白押しに催されていた。

秋葉神社は、明治四十五年(1912)に日豊線の開通で参道が遮断されたので上ノ町に遷宮され、大字浜脇一帯に神輿の神幸が始まった。

住吉神社は、浜脇(向浜)の漁民と楠浜の廻船業者の共催で、神輿を曳くのは漁民、先導するハウアンエは楠浜の住民から出して、浜脇漁港から楠港までの沖を飾り船に鉦や太鼓を打ち鳴らして賑やかな海上渡御が行われた。海上渡御については天保十年の記録がある。

浜脇の3大祭のかたちはそれぞれ時代の変遷と共に変化したが、薬師祭も時代に即した方法を取り入れて守り続けられてきた。

薬師祭は浜脇温泉の湯薬師如来の祭である。

湯薬師如来座像は、お薬師様と親しまれて、現在は浜脇温泉広場の一隅の小社に鎮座している。

薬師如来座像は檜材の座高17cmの一木造である。破損が著しいが小像のわりに力強い肉付けや衣文は鋭い彫り口を示し、平安前期彫刻のなごりが見られる。

※『湯あみ』(平成十一年刊)大分県立博物館

聖徳太子の父用明天皇が病氣平癒のためにこの地を訪れたという伝承がある。



薬師佛は豊国法師の作と伝えられ、人々を病から救うことを本願とする現世利益の佛であり、温泉の効能と結び付いて盛んに信仰された。浜脇温泉の守護佛として古くから祀られてきたものである。

浜脇の薬師如来座像についての縁起は伝えられてないが、浜脇温泉は古くは「吐呂とろの湯」と

称され別府温泉の中で最も古い温泉とされている。巷間薬師祭の起源を安和年間(968~70)と伝えられるが、或いは仏像が安置された年代かも知れない。

本尊佛は、現在八月下旬に3日間薬師祭の際に開帳されている。

## 湯薬師佛祭祀堂

明治十四年(1881)に描かれた「豊後州速見郡濱湧温泉場賑之図」に薬師堂の宝形造の屋根が見える。

明治二十九年(1896)の浜脇絵図に、東の湯(弦月泉)・西の湯(清華泉)の西に、薬師町に面してかなり大屋の薬師堂が描かれている。

昭和初期、浜脇の区画整理のため、別大国道(10号線)東側(現在浜脇公園)にあった霊砂泉横に湯薬師佛の堂宇が建立されたが、ルーヌ台風で霊砂泉ともども倒壊し、その後崇福寺に合祀され祭に際して出開帳していた。

昭和四十四年(1969)に仮堂が造られたが、平成三年(1991)、浜脇しょうしやの区画整理後に現在の位置に瀟洒な薬師堂が建立された。

## 湯薬師の祭

浜脇湯薬師に関する最も古い文書記録は、寛政八年四月(1796)の「浜脇・田野口 両村湯薬師佛きめがき極書」である。これは、湯薬師佛の法要と薬師堂の維持に関する取極である。かつて類焼した小堂を、寛政八年に村中一同相談の上、新薬師堂を建立したとある。



浜脇・田野口 両村湯薬師佛極書

一往古ヨリ當両村へ湯薬師佛コレ有リ候処類焼ニテ小堂もコレ無キ様成行候ニ付、此度村中

一同相談ノ上薬師堂建立致シ候事  
 一毎年四月八日、崇福寺ヨリ薬師佛法養として  
 大般若転読仕り候事  
 一右御祭入用料として、崇福寺ノ上ニ少々ノ畑  
 地古来ヨリノ引付を以て、庄屋八郎兵衛方ヨ  
 リ崇福寺工寄附致置候間、末々迄も怠り無ク  
 大般若御勤可被成候事、尤モ品々ノ参物は崇  
 福寺工至り申ス可ク候、其余平日ノ参物（供  
 え物）は薬師堂修復料ニ相備工置ク可ク申候  
 事  
 一右御祭ノ節町中ヨリ白米五合宛差上、四月八  
 日御出家衆相伴仕り、御祭賑々敷相勤可申候  
 尤モ崇福寺ヨリ毎年右佛供米調ニ相廻り可申  
 候間、志コレ有リ候者は白米五合ツツ差出シ  
 参詣致可候事  
 一末々ニ至候テ参物計ニテ修復相届申不候ハハ  
 町中相寄相談ノ上修復取繕申可事  
 一後年ノ為此書付五通相認メ崇福寺・両村庄屋・  
 町百姓惣代ノ者方壱通宛預り置申候事  
 右ノ通、此度相極候所相違コレ無ク候ニ付、崇  
 福寺・両村庄屋・組頭・町中惣代一同印形い  
 たし置候処如件  
 寛政八年辰四月

浜脇村

崇福寺 印

浜脇村庄屋

八郎兵衛 印

以下略

前掲の「両村湯薬師佛極書」によれば、湯薬師の法要は四月八日にご開帳して、崇福寺の僧侶をはじめ出家衆を招き、大般若経を転読して賑やかに催されたとある。村人が村中あげて祭礼を行ったとの記録はない。湯薬師は鎮座して幾星霜、温泉の恩恵を受け、薬師如来の靈験あらたかなご利益にあやかる庶民の厚い信仰心に支えられたのであろう。同じく亀川野田の長泉寺の薬師如来座像も平安前期作の檜一木造りであり、温泉に対する同じ信仰心に支えられたも

のであろう。

※古文書は友永家に保管されていて薬師堂に進された。堂内に掲示していたが紛失して今はない。

### 竹細工とつくりもの

浜脇地区の後背地の鳥越・赤松・枝郷・内成などには竹林が多く竹工芸に適した孟宗竹が竹材として切り出されていた。内成は府内領であったが、牛や馬の背をかり鳥越峠を越えて持ち込まれた。浜脇・田野口・朝見・別府の村々では豊富な竹材に恵まれて、竹細工の手内職が営まれていた。

竹製品は主として大小のざる箆や蒼器（しょうけ）など日常生活に用いる竹籠類であった。江戸時代の後期にな



り、商品として販売されるようになると、農業の傍ら本格的に竹細工を家内工業とする副業も起こった。

「天保絵図」には、浜脇温泉土産として竹簾たけすだれなども紹介されている。

江戸時代の後期、庶民の旅もある程度自由になり、特に湯治は農民の労働力の再生産、健康の維持などで大目に見られて入湯客も増えた。農閑期には温泉場が賑わうようになり、前にも述べたように、浜脇村では持ち家の部屋に客を泊める木賃宿を営む者も増えた。

浜脇温泉では入湯客が持ち帰る手みやげに竹製品が重宝されたので、家の間口に商品の竹籠を積み上げて売る町屋も多くなった。

薬師如来の開帳法要が営まれる縁日の前後は、善男善女の参詣人が集うと、町屋では湯薬師への供養として、様々な竹籠を巧みに組みあげ花鳥風月を見立てて飾るようになった。また、入湯客も竹籠の「つくりもの（見立細工）」の見物を期待するようになり、作る方も趣向を凝らし

て拵らえ、出来栄えを競うようになった。

郷土史家の堀藤吉郎氏は、竹製品を素材とする「つくりもの」は薬師祭に際して浜脇村の住民により創造されたものである、と云われていた。因みに竹細工は、江戸末から別府の伝統工芸として今日まで引き継がれている。

### 籠細工から見立細工へ

浜脇村は江戸時代末から明治時代にかけて入湯客が増加して木賃宿も食事道具などを貸し出すようになり、それが旅籠に替わると宿泊設備も完備されてきた。

明治四年、楠港が整備されて瀬戸内海航路が開けると、大阪で盛んであった見立細工の「つくりもの」文化が伝わってきた。

旅籠になって什器や食器など見立細工の材料が揃ってくると、浜脇温泉でも「つくりもの」が可能になり、竹籠の「つくりもの」から見立細工が主体を占めるようになった。

明治中期になると交通の便もよくなり、鉄道が開通して停車場ができると浜脇の温泉場が繁昌し、風流見立細工は薬師祭の呼び物になった。商店や仕舞屋にも見立細工を飾る協賛者も増えて賑やかな祭になった。

### 風流見立細工(つくりもの)

風流見立細工とは、趣向をこらした人工的で、とりわけて華やかな様子をそなえた「つくりもの」のことである。



皿としゃもじの白鳥

見立細工は、身のまわりにある陶磁器や塗り物一式など同じ材質の器物、化粧道具など同じジャンルに属する器物、荒物屋などそれぞれの商店で扱う商売物を材料にして、品物本来の形を改変することなく巧みに組み上げて風景、花鳥風月、器物、風俗、判じ物に見立て、華美に或いは簡素に、滑稽、諧謔、風刺など機知に富んだ「つくりもの」である。

鷹は、銭屋(両替商)道具一式の見立細工で、小銭、四文銭、當百、額銀、と小判一朱、銭屋の前だれで作られている。

判じ物は、一種の謎かけの「つくりもの」で、琴と三味線を無造作に並べて展示する物もあった。心は、「琴三味線」で「今年じゃ見せん」と解く。つまり、今年の見立細工は休むという判じ物である。



『造物趣向種』式編下「鷹」



和楽器の御所車



虚無僧



蛇をくわえた梟

明治のおわりから大正にかけて風流見立細工が盛んになり出来栄えを競うようになると、大阪の見立細工を参考にするようになり、安政期に発行された和本『造物趣向種』などを購入して工夫するようになった（外山健一氏談）。風流見立細工の図絵は外山氏蔵書の『造物趣向種』式編下より転載した。絵図中の○には部位と材料とが書かれている。残念ながらこの造物趣向の図を手本にする「つくりもの」は材料が稀少化したため実現が難しくなった。

最近では素材は自由になったが、見立細工の志向は引き継がれている。かつては、見立細工の背景や点景に自慢の屏風や骨董品を飾る家もあった。



『造物趣向種』式編下「飾具足」

## 薬師祭の経過

かつて、薬師祭は浜脇地区の魚町、入江町、薬師町、新町が主会場で見立細工もこの五地域で催されて、毎年黒山の見物客が押し寄せた。

昭和十年から十五年頃が最盛期で、通りに面した部屋を開け放して、旅館は風流見立細工、遊郭は歌舞伎人形、商店は商品棚や陳列の一部を利用して細工を展示した。この頃薬師祭は「人形祭」ともいわれた。祭は灯ともす頃から賑やかになり、裏通りの仕舞屋も路地に面した部屋に見立細工を展示したので、浜脇独特の複

雑な路地裏にも人が溢れ、路に迷って右往左往するのも祭の一興であった。

戦中も薬師祭には通りに面した一隅にささやかな細工物が見られたが、戦後の復興とともに薬師祭も復旧して見立細工に盆踊や舞台演芸などが加わり盛況を取り戻した。

昭和二十六年十月十四日のルース台風で霊砂泉と共に薬師堂も復旧不能の被害にあい、新町、魚町、入江町も高潮の被害を受けた。なお、倒壊した薬師堂の一部が、北的ヶ浜の金剛頂寺の本堂に再建されている。薬師如来座像は難をのがれて崇福寺に合祀された。



金剛頂寺

その後、売春防止法により遊郭の灯が消え、旅館は老朽化に加えて入湯客も著しく減少し、見立細工は一時衰退の傾向にあった。

薬師祭は出開帳の形で従前通り続けられていたが、南部地区再開後、見立細工が軒並みに展示されていた町並みの様相は一変した。

平成三年三月、地区住民の熱望により温泉広場の一角に薬師堂が建立された。

開発後浜脇地区は、温都ピア浜脇の温泉広場を中心として開発が進み商店街も蘇り繁華が戻ってきた。

薬師祭は地区住民の努力で見立細工を飾る家も次第に増え、地区やコミュニティーで協力して「つくりもの」を展示する場所も用意されて急速に復活した。祭礼行事にも艶やかな花魁道中やお化け屋敷、子供太鼓も加わり、時代に即した祭へと発展した。

## 薬師祭の意義

浜脇薬師祭は地域住民にとって欠かせない伝統的な祭礼である。地域住民は浜脇温泉の恵沢に感謝し、靈験あらたかな薬師如来を平安時代から厚く信仰してきた。

現在、薬師祭は八月末の3日間、薬師堂でご開帳が行われ、温泉広場を中心に開帳法要に始まり、見立細工・盆踊り・舞台演芸・花魁道中・お化け屋敷・子供太鼓の演奏で内容も盛り上げられている。

薬師祭の主要行事の風流見立細工は、地場産業の竹細工と温泉場の繁栄が深く結びついて起り発展したものである。見立細工を含む薬師祭礼は浜脇地区個別の民俗行事として次世代に継承すべきものである。

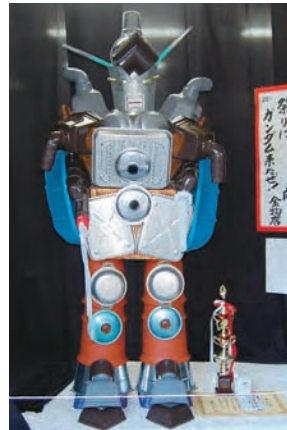
## 現在の浜脇薬師祭(平成二十四年度)

平成二十四年の「浜脇薬師祭り」は八月二十四日(金)・二十五日(土)・二十六日(日)の3日間開催された。

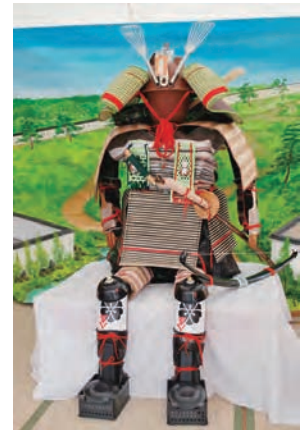
- 1 日目 薬師如来法要  
富くじ販売  
浜脇子供太鼓  
薬師お接待  
開会式 もちまき・富くじ抽選会
- 2 日目 ユニークダンスシアター  
大沢あすかショー  
花魁道中
- 3 日目 はまゆうフォークダンス  
薬師音頭大会

見立細工の出展は30件におよんだ。

市長賞は「祭りにガンダムが来たぜ」の金物一式見立で、議長賞は「平清盛」であった。



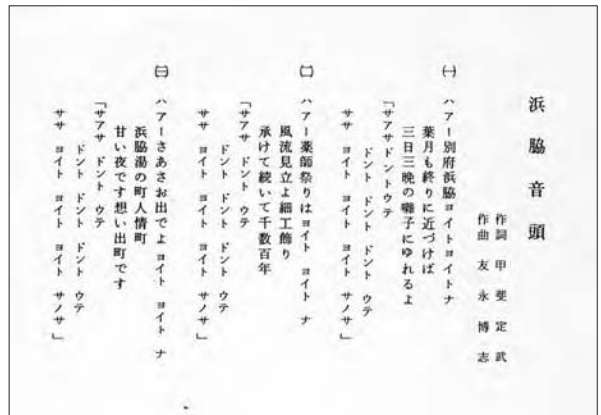
「祭りにガンダムが来たぜ」



「平清盛」



花魁道中



「浜脇音頭」の歌詞



浜脇音頭大会



## 「別府浜脇の薬師祭り」と

### 県内に伝わる見立て細工

小玉洋美(別府市文化財保護審議会委員)

現在、大分県内で行われている祭礼行事に伴う見世物としての「見立て細工」には、次の4件が知られている。

- (1) 別府市浜脇薬師祭りの見立て細工
- (2) 大分市長浜神社秋祭りの見立て細工
- (3) 国東市安岐町小川商店街の見立て細工
- (4) 玖珠町塚脇地蔵講の見立て細工

上記の他に大分市萩原の天満社、日岡の高松神社、三佐の野坂神社、松岡の御手洗神社などの祭礼に際して毎年作り替えられる人形山車の人形を「見立て細工」と呼んでいる。日田市の祇園祭りの飾り山車の人形も毎年作り替えられるが、これは見立て細工とは呼ばない。

大分市の神社の祭礼に参加する人形山車の人形は、三佐の人形師が毎年作っており、題材もNHKのテレビ劇をテーマにしたものが多いが、作風は歌舞伎役者を模している。これは元来の見立て人形(生き人形)が、歌舞伎の名場面を題材にしていたことに起因しているからである。

後述するが、旧大分市の西新町天満社、春日神社、住吉神社などの祭礼に作られた見立て細工は「生き人形」が主流であったが、昭和戦前期(戦争中)に消滅してしまった。

これら、現行の見立て細工に関する資料と調査から、県内の見立て細工の系統にふたつの流れがあることに気付いた。すなわち(1)別府市浜脇と(4)玖珠町塚脇の起源は異なっており、(2)大分市長浜と(3)国東市安岐の行事は戦後になって(1)の別府市浜脇の見立て細工から学び類似性を継承している点である。しかし、(3)の安岐町の見立て細工は、国東町鶴川で催されていた見立て細工にヒントを得ていた点も見逃せない。(12頁参照)

## (1)別府市浜脇薬師祭りの見立て細工

標題の薬師祭りで見立て細工については、入江秀利氏が別項で詳述しているので、私は入手した大正七年(1918)九月三日の大分新聞と昭和四年(1929)八月三十一日の豊州新報の記事を紹介することから始めよう。(一部を書き改めて、句読点を付した)

大正七年(1918)九月三日付の大分新聞には「秋浅く<sup>せん</sup>温都夜祭りー見立細工に夜は深うして」という見出しで次の記事が載っている。

(前略) 見立細工にはなかなか振ったものが少なくない。森百支店の呉服太物類の売品で美しく大仕懸で意匠した「宝船」と検番前の瓜生田乾物店の「佐賀騒動怪猫退治の場」で、小森伴左衛門の衣裳を混布と海苔とでつくり、怪猫を天草で、神殿をマッチ箱と鐘詰で作り上げた所はまことに巧だ。(中略) 判じ物では日本軍の向う所敵なしだの、塩二皿と蛙を配して、女郎買いの朝がえりシホシホかえるなど小さくとも気のきいた見立て物が限りなく目をひいていた。出し物では大袈裟な点に於いて泉丈の「狐忠信」、東楼の「恋女房重之井子別れの場」(中略)、『ナンボ金目をかけて飾った人形の出し物より店の商品や有合せの什器で巧に軽く、そして新しく意匠された見立て物の方が小さくとも気がきいてまさア』とは雪崩のような人混の中で誰かの言ったところである。折柄の天気にも、薬師祭りの浜脇は十二時過ぎまで押すな押すなの大混雑を呈し夜をこめて賑った(後略)

昭和四年(1929)八月三十一日の豊州新報の見出しは「別府名物の浜脇薬師祭り」とあり、本文は次のとおりである。

別府名物の浜脇薬師祭は三十、三十一の両日に執行されるので各町各区共一週間前から見立細工や町内の装飾に秘術を尽していたが、

三十日の朝から一斉に蓋明けをした。いずれも目の覚むるような出来栄で、すこぶる人気を呼んでいる。名物薬師祭りはいつ頃から始ったものか、其起源は詳かでないが浜脇の東西温泉に祭られてあった薬師如来の御祭りから始まったもので（中略）この三ヶ月の湯が浜脇東西温泉となり、また今年の浴場大改築で、浜脇温泉と改称された（中略）各地の病者が集って入浴し、その都度薬師様に礼拝して病氣平愈を祈ったものであった。ところが不思議にも病氣が全治し、足や腰の立たない病人も帰る時には杖を薬師様に納めて平気で帰る。（中略）病者の納めた杖が御堂一杯に積んであった。（中略）僧侶を招いて法会を営み、その際に杖や病人の納めて帰った品を陳列してお祭りを行ったのが、その後見立細工となり、今から六十年前（注1）は旧七月二十日には町民が集って薬師祭りの協議をして、二十一日から見立細工に取りかかり、（中略）町内一軒残さず見立細工をして廻り旧七月二十六、七日を祭日と定め、この見立細工で町内を賑わせた。（中略）見立細工を見に来る人が何千という多数で、二日間の薬師祭りは人の市であった。以来見立祭りはしばしば改良され、文化の進歩に伴って今日のような人形も出来（注2）、また、電気を応用した種々の設備が出来、浜脇薬師祭をして数万の人出がある別府温泉場の催しでは唯一の名物とされたものらしいと

注1 記事が掲載された昭和四年から60年前なので、明治二年頃か。

注2 この人形は、大分市の天神祭で作った生人形を買い求めて店頭飾ったという。

上記のような薬師祭りの賑いと見立て細工の隆盛をもたらしたのは、明治五年（1872）に浜脇温泉が県費によって改修され、同七年、同十二年にも県費による改築が行われたことや、明治二十六年海岸に霊潮泉が開設されたことによる。この年には町制を敷いたが、同三十三年に

別府町と合併して別府町となった。この間に、明治三十三年には別府・大分間に電車が開通、同四十四年には浜脇停車場が開業した。また同年末に海岸の埋め立て工事が始まっている。大正四年（1915）大分県立工業徒弟学校と改称し、大分市に移転した別府工業徒弟学校が浜脇に開設されたのは、明治三十五年で、竹製品の改良・工芸品化が進んだのも浜脇薬師祭りの繁栄に貢献した。昭和三年（1928）には浜脇高等温泉が完成し、別府市制5周年を記念し中外産業博覧会が開催されたが、浜脇海岸の埋立地が第2会場となっている。戦時中や戦後の台風被害で一時的に中断した時期があったが、昭和四十九年に見立て細工の展示が復活し、現在に至っている。

## (2)大分市長浜神社秋祭りの見立て細工

大分市塩九升町の長浜神社の秋祭りに際して催される見立て細工は、昭和三十二年（1957）に浜脇の見立て細工を模倣して始められたもので、商店街65軒の半数が参加して始められたという。コンクール形式をとり、市長賞や商工会議所会頭賞などが与えられていたが、中心市街地の復興が進むと廃止されたようである。

## (3)国東市安岐町小川商店街の見立て細工

国東市安岐町小川商店街の見立て細工も浜脇薬師祭りの見立て細工にヒントを得たと思われるが、当時催されていた国東町鶴川の見立て細工の影響も無視できないようである。

因みに平成二十年（2008）七月二十九日の大分合同新聞朝刊を紹介すると、

（前略）見立て細工は同商店街で戦後間もなく始った伝統行事。商店や地域住民、小学校児童らの作品が各商店に並んだ。ことしは大分国体や北京オリンピックのキャラクター、子年にちなんだ作品が目立った。段ボールやペットボトルなどを材料に、工夫を重ねた作品が訪れる人の目を楽しませた（以下略）。

参考までに紹介すると、小川商店街では戦前まで八幡社（旧郷社）の夏祭りに囃し手を載せたダンジリ（山車）を引いていたが、戦後は七夕祭りや夏祭りの見立て細工のコンクールが続けている。

#### (4) 玖珠町塚脇地蔵講の見立て細工

森藩久留嶋陣屋の城下町であった森町には地蔵講の際に見立て細工が行われていた。しかし、明治十六年(1883)に大火災に見舞われ、その後は見立て細工を再興できぬまま推移していたが、玖珠川を距てた塚脇商店街の地蔵講において、見立て細工の行事が継承され、今日に至っている。昭和六十三年(1988)八月二十四日の地蔵講で、百年祭を催しているが、塚脇商店街では明治二十一年(1888)の地蔵講から見立て細工が始まったと言われている。別府浜脇の見立て細工の技法を学んだ形跡は認められないが、「見立て」のアイデア(発想)は共通している。

本稿は、塚脇地蔵講の見立て細工について紹介するのが目的ではないので、現在の状況を平成二十四年(2012)九月一日の大分合同新聞の記事を借用してみることにした。

(前略) 地区内の自治区や幼稚園、小学校が作った13の見立て細工が通りを彩り、多くの家族連れらでにぎわった。見立て細工は人気のアニメキャラクターや動物をテーマにしたものなどさまざま。ロンドンオリンピックを題材にした作品もみられた。

以上のように、大分市長浜と国東市安岐町の見立て細工は、別府市浜脇の見立て細工からの直接的な系譜が伺えるのに対して、玖珠町塚脇の見立て細工は、もとは玖珠川を距てた森町で行われていた行事が継承され現在に至っている可能性が高いと考えられる。



塚脇地蔵講の見立て細工(山路踊り)  
背景に森藩主の家紋が描かれている

#### 【参考資料】

##### 「大分市内の見立て細工」

見立て細工は見世物の一種で、江戸時代の三都(江戸・京都・大阪)の人々が集まる盛り場で出現した。大阪では幕末期に道頓堀の近くの難波新地で手品・軽業などと並んで「生人形」「見立細工」「陶器細工」などの作り物(細工物)が好評であった。竹を編んで人物・鳥獣などの姿を作り、上に紙などを被せて彩色した「籠細工」が文化年間(1804 - 1844)から盛んとなり、文政期から天保年間(1830 - 1844)まで江戸や大坂の籠細工職人が活躍したが、幕末期には他の見世物にその芸を奪われている。(『幕末明治見世物事典』吉川弘文館・平成24年)

見立て細工は江戸時代には「作り物」「<sup>こしら</sup>拵え物」と呼ばれていたが、大分の府内藩の記録(「府内藩日記」文政八年二月二十三日)に「見立細工」の用語が使われているので紹介しておきたい。

- 一 若宮八幡宮御幸二付、是迄の通為賑御座候間、氏子中より坊々小路於河原、有合の品を以、見立細工奉納仕度由申候間、此段宜被申上可被下候(松末、府内庄屋より願出)

上記のように「見立て細工」は<sup>ありあわせ</sup>「有合の品」で作っていたが、材料名と作品名が記されていないので、詳細は不明である。しかし、坊々小

路河原は御神輿の御旅所であるから、群衆を惹き付ける細工物が毎年作られていたと思われる。当時あっては歌舞伎芝居を模した「生人形」や神仏像、動物や植物の精巧な見立細工が好まれたに違いない。

祭礼の時の作り物については『大分市史上巻』（昭和三十年刊）に次のように記してある。

勢家の住吉宮においては早くから始まっていたが、荻原の天神宮においては、享和二年（1802）六月二十六日、作り物小屋二軒を立て、下記の作り物が立てられた

- 一 天網島（茶屋の段） 中東町・下東町
- 一 壇浦兜軍記 田町・丁畑

また天保十二年（1841）七月二十日、萩原村庄屋園田伴左衛門より、来る二十五日天神宮祭礼の社内造物小屋の造り物として、新町東西より「祇園祭礼信仰記四段目」と届けている例もある。

住吉神社の見立て細工について『大分市史・下巻』（昭和三十一年刊）には次のように記してあるので引用しておく。

この「船祭」の時には、（住吉神社の）境内では作り物が氏子の各町や商人仲間から奉納され、また社地の内外には露店が立並んで、多数の参詣人で賑わった。正徳二年（1712）六月晦日の祭礼に例をとると、（中略）「作り物」には、魚町から奉納した「えびす人形」や堀川町の「大友眞鳥人形」、粗物仲間の「水茶屋人形」等があって、「人立」（参詣人）は壱萬程であった（府内藩日記）

また、同市史の上巻、民俗志（第五章 祭と信仰）には次のように記してある。

七月十八、十九日は春日神社、廿一、廿二日は王子神社、廿四、廿五日は天神さま（西

新町）の夏祭である。春日神社、住吉神社の祭にも各町が見立て細工を作ってその美を競ったものであるが、天神さまのお祭にもそれが出来て人足をひいた。境内の裏側の小屋に、芝居の有名な外題の中の一景を等身大の人形であらわした見立細工が出来、附近の町々の老舗もこれにならって客足を止めたという。廿七日をヨド（宵宮）として廿八日は住吉さまの祭である。（中略）廿八日の夕方、神輿は船頭町の川口という豆腐屋の門口附近から乗船して新川の沖をまわり、お帰りには今の勧業銀行の附近「船場の鼻」でおあがりになった。やはり浜町のカイサシが櫂を肩に担って参集して、御霊移し、御霊納めに奉仕し、海上渡御にも従った。（中略）神輿の「おまわり」は夜半の二、三時頃まで続き、市内は大賑いであった。お宮の境内を始め船頭町・魚町・京町等にも見立細工ができ、等身大の幾つかの人形が描き出す芝居の一景が多数の見物人を集めたという（後略）。

西新町の天神さま（天満社）の夏祭りは前述のとおりであったが、大分新聞の記事に見立て細工の記事が掲載されているのを引用させていただくことにした。（『大分市伝統文化調査報告書・8 上野丘碩田地区』大分市教育委員会・平成二十四年刊より）

大正八年七月二十四日の「天満社神幸祭 非常な賑わい 町内見立細工大いに興を呼ぶ」、大正十四年七月二十六日の「大賑い天神祭り」、昭和五年七月二十五日の「数十ヶ所に見事な見立細工大分名物の天神祭賑やかに執行さる」、昭和八年七月二十五日の「天満社祭典 神輿巡行 第二日も賑わう」、昭和十一年七月二十五日の「西新町の天神祭」などの記事が見立細工について觸れており、その中には見立細工の題目を詳細に記したのものもある。ところが、戦時中の昭和十八年七月二十六日の

「西新町天満社」という記事には神輿の巡行については記しているが、見立細工については一言もない。戦後になると、見立細工の記事はまったくないようである。

※私の調査でも西新町天満社の見立て細工は戦争中に廃止されている。



萩原天満社境内の作り物（平成24年）

#### 「玖珠町森町の見立て細工」

消えた「作り物」の例を、森町の地蔵講で紹介してみよう。（『玖珠町史・下巻』（平成十三年刊）小玉洋美執筆より）

森町の本町通りは上町・中町・下町から成っているが、明治二十三年の大火災前は呉服屋が七軒もあって賑わっていた。旧七月二十四日・二十五日の地蔵講には、各組が見立て細工を飾って、見物人を集めていた。塚脇の商店街が発達する以前は、森町の地蔵講の方が盛んであったのである。明治十四年に書き起こされた玖珠郡森村旭谷の記録「秋葉・地蔵両講座会順番帳」の前書きによると、旭谷の地蔵講は天明二年(1782)に始まり、安政六年(1859)に始まった秋葉講を明治五年(1872)に合併した。旧七月二十四日の地蔵講の祭りには、作物（見立細工）を出して賑わっていたが、政府の神仏分離・神社合祀の方針を受けて地蔵尊を大乘寺へ移した。明治十四年になって、地蔵講と秋葉講の祭日を七月二十四

日に統一し、先年大乘寺より旧のお堂に還してあった地蔵尊の堂内に、作物（見立細工）を飾ったら、参詣人が集まって大賑わいであったと記す。原文は次のとおりで、明治十四年に記帳を始めた溝口某の筆記である。

（前略）講ヲ発起ス、明治五年二至り秋葉・地蔵両講ヲ合併シテ、旧九月廿四日二座会相催ス、旧七月廿四日二ハ作物等致シ賑々敷祭典ス、明治六年御趣意ニ依り地蔵尊ヲ大乘寺内ニ移シ、米壺石ヲ御供米ニ寄附ス此年神社合併ノ御布達ニ付テ間々誤解ス（中略）明治十四年旧七月廿四日溝口康直宅ニテ昨年決議ノ如ク講座相務、祭典致候、尤大乘寺ヨリ地蔵尊ヲ旧堂ニ先年迎へ有之二付、同方ニ作物等致シ参詣人群集口口大二賑合候事（以下略）

さて、見立細工（作物）が明治五年に行われていたことは、右の記録から確かであるが、同帳の明治二十六年の座前中野貞敬の記録に、「従来の習慣トシテ見立細工相催来候処、本年八国姓翁和藤内こむつ嶋蛤争ヲ見ルノ段」「細工物・一、大釜式個を合わせ蛤となす一、木鋏・鎗・鍬ヤゲン等の金物を以て嶋とす一、衣<sup>(ママ)</sup>常人形式個」「以後見立細工ハこの帳簿に記載し、後年の参考とす」以上の記述があり、明治二十七年以後の見立細工の題目と材料が記されている。作物の題目をみると、歌舞伎芝居や人形浄瑠璃の名場面、日清戦争と日露戦争の年には時局に関する見立細工が、日用品や農作物を利用して作られているが、このような傾向は現在行われている塚脇地蔵講の見立細工に引き継がれているようである。

森町の旭谷地蔵講は、明治四十三年に見立て細工を廃止している。すなわち前記の「両講座会順番帳」の明治四十三年（1910）の座前の記録に（前略）「一、右ノ次第及び近年ハ当組モ少数ト相成り、作物見合ハセノ事二

決シ候也」とある。旭谷組が見立細工を作るのを見合わせるように決めた理由は、講員の減少に因るのであるが、本町筋は明治十六年（1883）の大火と明治二十六年（1893）の大洪水による被災によって見立て細工を飾る店舗が消えてしまったようである。

一方では、玖珠川を距てた塚脇地区の商店街で見立て細工が始まったのは明治二十一年（1887）からと言われ、現在も続けられている。



日露戦争当時の作物見立細工の記録

#### 「国東市国東町鶴川商店街の見立て細工」

昭和五十三年（1978）の『興導寺誌』（国東町興導寺公民館発行）に次のような記事が載っている。しかし、商店街の衰退に押されて、現在は催されていない。

鶴川下の台に、今在家村の氏神である事代主社がある。俗に「おえびす様」と尊敬され、鶴川村の時代から広く親しまれて、お詣りに来る人が多い。

この宮の祭事に「見立細工」という名物がある。素朴なものながら、安永の昔に発祥しているという。戦争の頃でも、このお祭り行事は止めきれぬとして、継続し、今日では鶴川の大きい呼物の一つとなっている。

旧の八月一日つまり八朔の日（当年は九月十一、十二、十三日）から三日間、興導寺商店街は異様な人出である。テーマは各小班ごとに独自の起案をして、八、九人の此の道の達者ものが腕を撫す。それで年々古趣味的なものから、芸術味のあるものに、クラシックなものと同近代感覚に訴えるもの。時談に王選

手を出したり、ロッキードに心はずませる諷刺的なもの、また罪のない童話の世界やら猛獣を写し、最近では恐竜、さては宇宙にまで手を伸ばすに至っている。創作であって、猿まねで無いから貴重なものである。宇佐、日出あたりから参考のために、その道の人が視察に来る現況である。

展示件数は七十以上は毎年出来るが、最終日に審査を施し、賞金なるものがあるそうだ。

#### 「佐伯市船頭町の見立細工」

七月二十五日の住吉神社の夏祭りに、船頭町の商店が見立て細工を飾っていた。昭和五十年代の記録で、いつ頃廃されたか不明。

#### 「久住町の見立細工」

竹田市久住町の久住神社の夏祭りに、4地区から4台の見立て細工を載せた飾り山車を出し、町内を引き廻している。現在も続けられている。

## 「造物趣向種について」

外山健一（別府市文化財保護審議会委員）

見立細工の種本『造物趣向種』式編下（安政七年：1860）の版本を浜脇の旅籠土佐屋を経営、元第5代浜脇町長（明治三十七年十月十九日～明治三十九年三月三十一日）故浜崎丑治（本名＝直則）が永年保有していた。

その後、浜脇の阿部京酒店・店主故阿部今平が譲り受けたものである。

『造物趣向種』は、当時の狂歌師らの手によって発刊されたが、その出来を称賛する狂歌を添えて掲載したものである。

また、実際の作り方に関する記述が見られることから、このことは単に見て楽しむだけ



『造物趣向種』式編下の本ではなく、見た人に造り物を作る機会を与えている種本である。

『造物趣向種』天明七年刊（鶴編）（亀編）

『四季造物趣向種』天保八年刊（乾上）（坤下）

『造物趣向種』安政七年刊（一編）（二編）

以上の3種6冊が現在確認されている。

なお『享保以後大阪出版書籍目録』には次のような記述が載っている。

『造物趣向種』天明七年刊（鶴編）（亀編）

画工＝山村屋元作（天満樽屋町）

版元＝井筒屋伝兵衛（梶木町）

出願＝天明六年閏十月十八日

許可＝天明六年十二月二十四日

つまり天明六年十二月二十四日許可を得て、天明七年に発売したことになる。

さらに『造物趣向種』二編 今昔造物誌5冊

『造物趣向種』三編 造物仕様集5冊

『造物趣向種』四編 近世造物記5冊

以上の三編は現在所在が確認されておらず、恐らく発刊に至らなかったものと思われる。

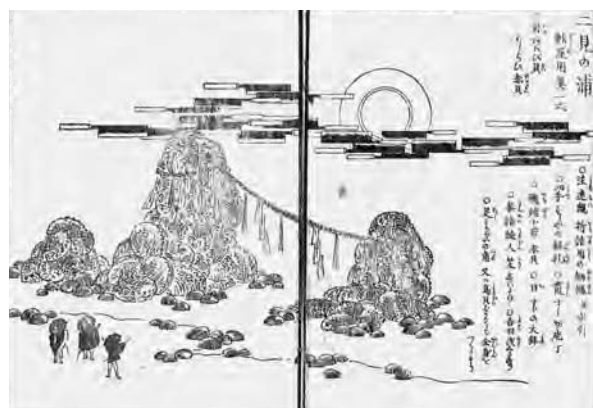
ここで注目すべきは、もっとも造物関係の出版物の担い手は、すべて上方の狂歌師たちである。なぜ江戸の狂歌師たちが造物関係の書物に関与していないのかは不明であるが、このことは『造物趣向種』に掲載されたようなツクリモノが東日本の祭礼の中で一切見られないということとなんらかの関係があるのかもしれない。



『造物趣向種』式編下「虎」



『造物趣向種』式編下「草摺引」

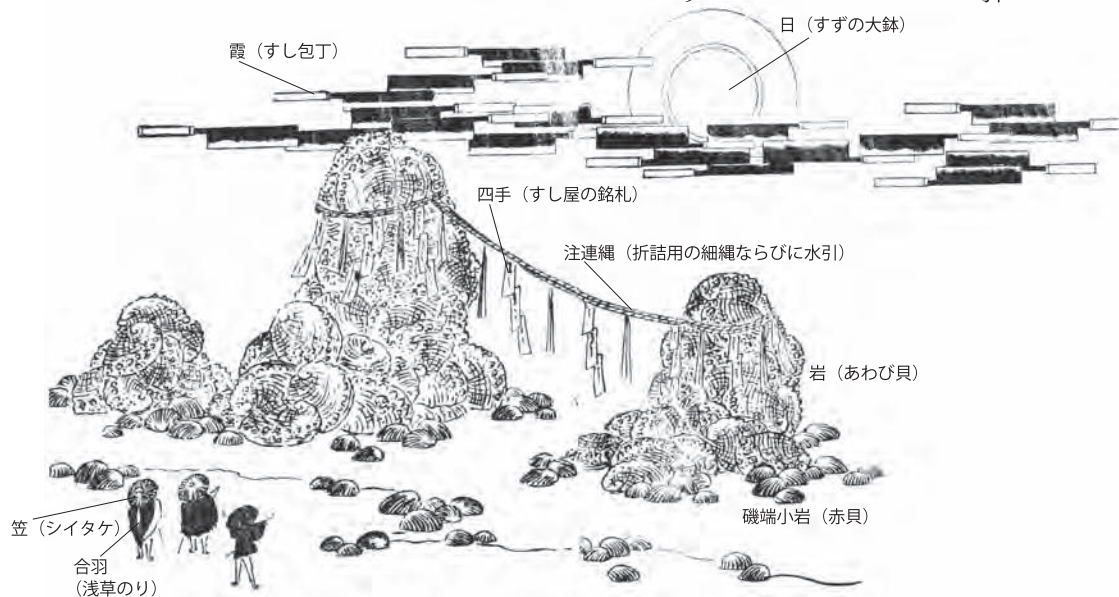


『造物趣向種』式編下「二見の浦」

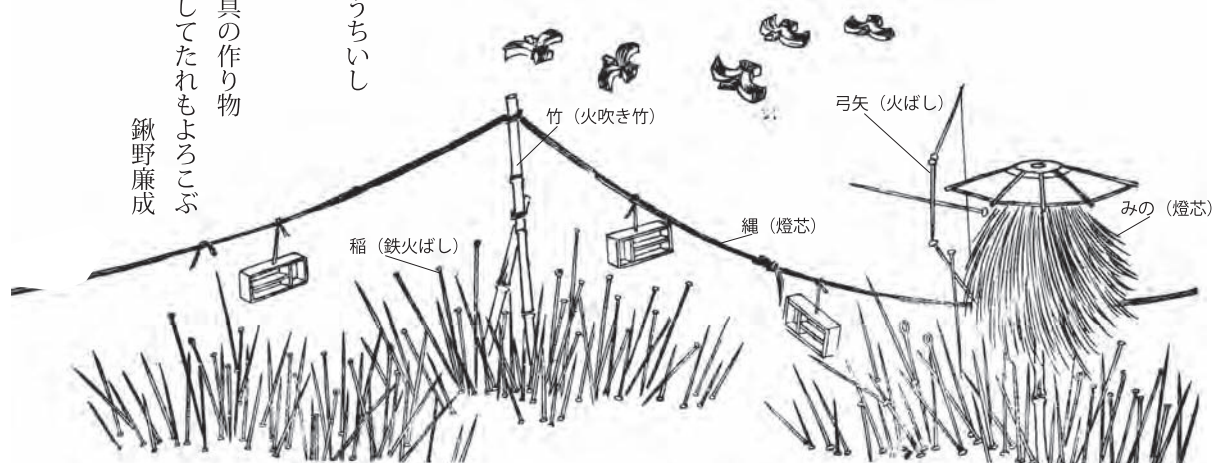
「造物趣向種式編下の読み下し」

入江秀利(別府市文化財保護審議会委員)

- 二見の浦 鮮屋用具一式
- 岩 あわび貝 あしらひ
- 注連縄 折詰用の細縄並びに水引
- 四手 すしやの銘札
- 霞 すし包丁
- 磯端小岩 赤貝
- 日 すずの大鉢
- 参詣旅人 笠 しいたけ
- 合羽 浅くさのり
- 足 とりがいの角また鳥貝ばかりにて全身をつくるなり



- かかし  
安山子
- 笠 八方
  - みの 燈心
  - 弓矢 火ばし
  - 竹 火ふき竹
  - 鳴子 火打ばこ
  - 縄 とうしん
  - 鳥 つけ木 火うちいし
  - 竹 火吹だけ
  - 稲 鉄火ばし
- 農民のさすが道具の作り物  
よく出来ましてたれもよろこぶ



鎌野廉成



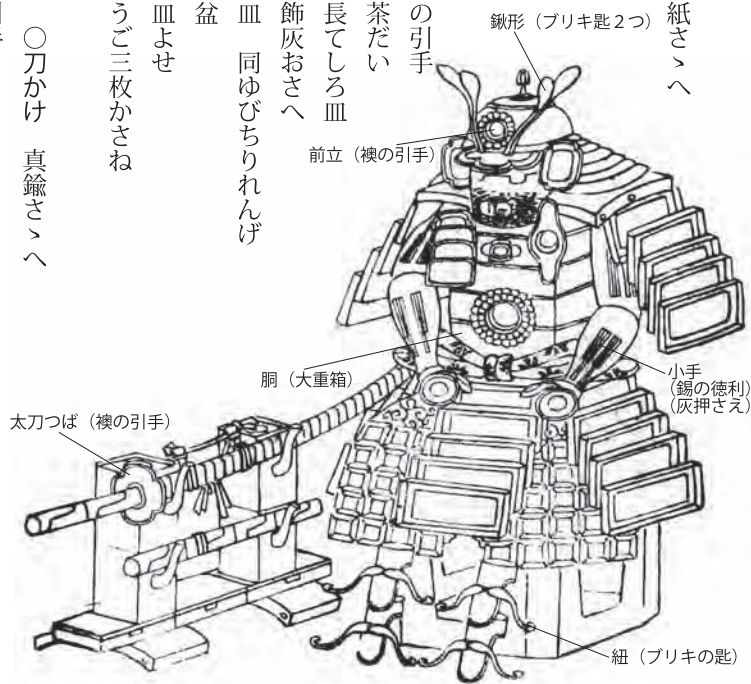
くさずりびき ぬりものいっしき  
草摺引 塗物一式

- 足 朱重食籠
  - 足首 横長の盆のふた
  - 五郎頭 朱重食籠
  - 髪 黒蓋臺茶だい
  - 目 塗さじ
  - 手先 しゃくし
  - 胴 塗行器
  - 着附 重宮のふた
  - 草摺 重ばこのふた
  - 太刀つば 茶だい
  - 柄 双六の筒
  - さや 塗りやうじ
  - おどし 糸やうじ
  - 朝比奈頭 食籠 額同蓋
  - 目 ぬりさし
  - 鬢 黒平のふた
  - 髭 食籠 ○根くり やうじ
  - 腕 食籠 ○手さき しゃくし
  - 着附 重宮のふた
  - 大紋の素袍 長袴 黒堺重のふた
  - 椽 春慶重宮 同枕 同はりばこ
  - つか 石青漆小重宮
  - 太刀 右二おなじ
- 和田ならぬ実塗ものの大寄に  
草摺引の高き評判 蕪野鈴成



かざりくぞく かざりたち かなものいっしき  
飾具足 飾太刀 金具一式

- 甲 眉ひさし もつこう形ぶりき煎茶盆
- 鉢 銅なべ ○鍬がた ぶりきのさじ二つ
- 前立 ふすまの引手 ○天返 てつびんのふた ○しころ 銅なべ
- 吹がへし ぶりきもつこう形てしろ皿
- 面 銅こんろ
- 甲わだがみ 真鍮地紙さへ
- 胴 大重箱
- 胸のかざり ふすまの引手
- 鳩尾 ぶりき舟がた茶だい
- 梅檀板 ぶりき角横長てしろ皿
- 小手 錫の徳利 同飾灰おさへ
- 手甲 ぶりきてしろ皿 同ゆびちりれんげ
- 袖 ぶりき横長煎茶盆
- 佩盾 ぶりき灰手白皿よせ
- 脛当 ぶりき茶じやうご三枚かさね
- ひも ぶりきのさじ
- 櫃 ぶりき大三方 ○刀かけ 真鍮さへ
- 太刀つば ぶすまの引手
- 柄 ぶりき茶れ
- 鞘 ぶりきいん籠 ○短刀 ぶりき茶入れ



りよつおう さかや どうぐ いっしき  
 陵王 酒屋道具一式

○面 銅かななへうつむける

同下二枚重鼻の下二作る

○頤 のかしら

○齒 のみ口のねじ

○目 のミ口のくだ

○頭巾 酒ふくろ

○□立龍 たこなハ

○指 のミ口のねじ

○腕 樽 ○手さき 四斗樽のつめ

○足 枅

○装束 酒屋のまえだれ

但し 洩染さしこ又酒ふくろ

○縁 ささら

○裾 酒ふくろ

○太鼓 切ばん ○巴 たこなハ

○火燃 木香 ○飾 とくり □のミ口のねじ

○太鼓臺 だし筐

お手際ハ実から口の一すぢや

たれも名手とかんじ入升 好野酒成



たからぶね ふくろものやいっしき  
 寶船 囊物屋一式

○船 ばちふくろ

かがみ囊

○積物 守りぶくろ

たばこ入れ

○舳 守袋

○欄干 緋のきせる筒

○ぎほし すいがらあげ緒メ

○楫 三ツ折紙入

同柄きせる筒

○帆桁 きせる筒

○柱 同上にすいがらあげ二

○印 守袋

○鶴袖 たばこ入

○首 きせる筒

○嘴 きせるさし入

○尾 黒袖たばこ入

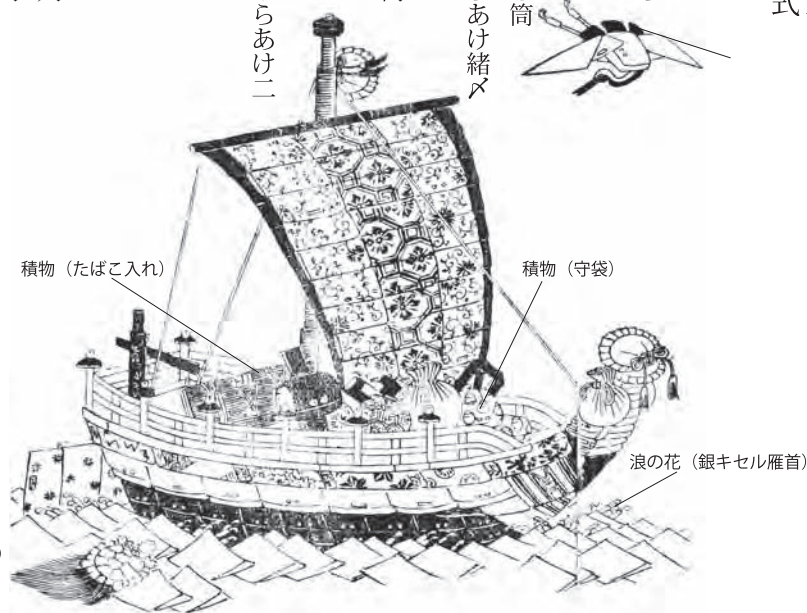
○龜 守袋

○波 浅黄湊口南草入

○浪の花 銀きせるがんくび

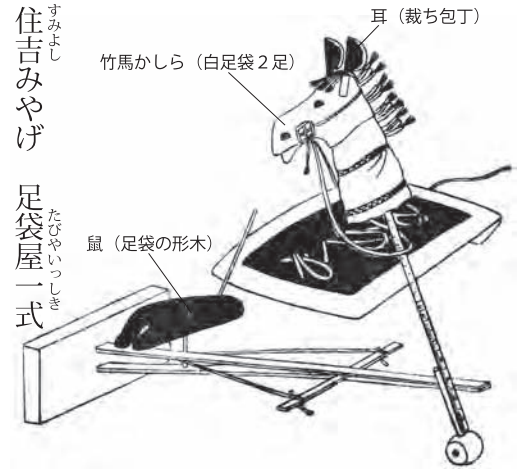
美しくき作りものとして皆目さめ

宝のふねのほどのよきかな 翠翁



しやうしやうまいほしものいしき  
**猩々舞 干物一式**

- 面 白干の鮑 ○赤熊 ききみするめ
- 目・鼻・口 ごまめ
- 手 丸のやきぶ
- 着付け こんぶ ○上着 青こんぶ
- 模やう 細工こんぶ
- 大口袴 するめ
- 扇 こんぶ ○石帯 氷どうふ
- もん しいたけ ○松幹 かずのこ
- 葉 青刺こんぶ ○枝 にしん
- 浪 氷こんにやく



- 竹馬かしら 白たび二足
  - 目 鯨のこはぜ 鼻穴 同
  - 耳 たち包丁
  - かみ 大津きやはんのひも
  - 駒 ひぢりめんの脚絆 竹尺
  - 轡 手づな 大津ひも
  - 車□ 車のびやうぼたん付のこはぜ
  - 鼠 たびの形木
  - はちき木 たびの尺
  - 尾 たびのひも ○糸 大津ひも
  - 上のかさ木 裁板
  - ごろごろやの袋 白もめん紺もめん
- 上に白の大津ひもにてごろごろやの文字を作りしるす

目・歯 (軽石)

とら  
**虎 荒物一式**

- 全身 ふのり 荒和布の斑
- 目 かるいし
- 歯 同
- 髭 かりやす
- 爪 かるいし
- 岩 桃皮
- 苔
- 耳の内 いさり貝
- あしらい かるいし



評判は千里の外もきこえなん

又は類ひはあら物の席 横堀間丸

おもと  
万年青 孔雀羽 金具一式

○おもとの葉 ぶりき茶わんだい

○実 しんちゅうのすず

○鉢 鉄のかんてら

○くじやくの羽

○玉かがみ ふすまの引手

○羽のしん しんちゅう火ばし

○羽 てつのくぎ



ばいぼくしゃ  
売卜者 酒宴用具一式

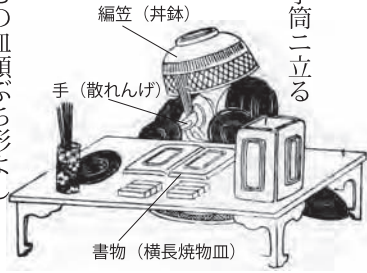
○頭 徳利 ○手 散れんげ ○編笠 井鉢

○着物 黒大平

○机 卓子臺

○筵竹 やうしを楊子筒二立る

○硯 玉子形焼物皿



○書物 角横長やきもの皿額ぶち形よし  
○あんどう 角横長焼物皿四枚

ほてい  
布袋 仏具一式

○頭 腹 乳

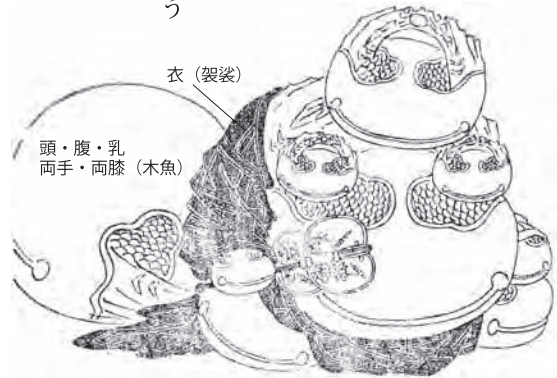
両手 両ひざ

ふくろいつれも

木魚

○衣 けさ

○團 花鬘 りんぼう



たか  
鷹 錢屋道具一式

○首 革ざいふ

○嘴 杜秤のかぎ

○目 小玉

○項 背 羽尾 小銭 四文銭 當百 額銀

○腹 とりばら

○足 素銅の矢立

○枷 天秤

○枷布 まえだれ 模様



きし  
雉子 乾物一式

○嘴 干いわし

○目 干くるめかしら

○目のふち 鱒の肉

○くびすじえら 荒和布

○背羽 紀州名産木のはかれ

或ハめんざしを用ゆ

○手羽 うるめ干もの

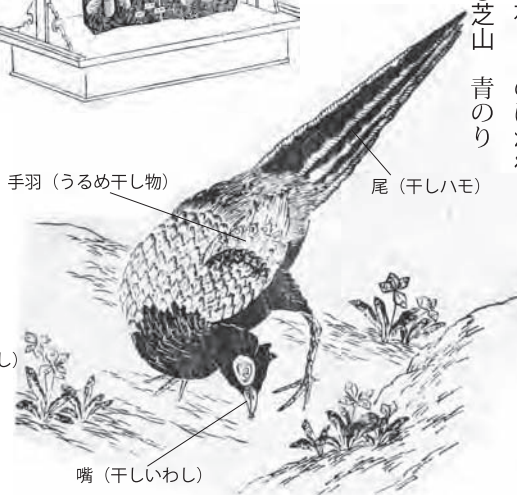
○みの毛 けずりするめ

○尾 干はも ○足 にしん

○野花 歯いわし 丸ぼほ

○花 このはがれ

○芝山 青のり



鬼 酒屋道具一式

○頭 太鼓だるの三口のめぐり二ねじをつける  
○角 ねじ

○髪 ささら

○うで かんたん同かんとくり

○腹 びぜんつぼうつむけ用ゆ

○両ひざ 坪

○三味 一升枡

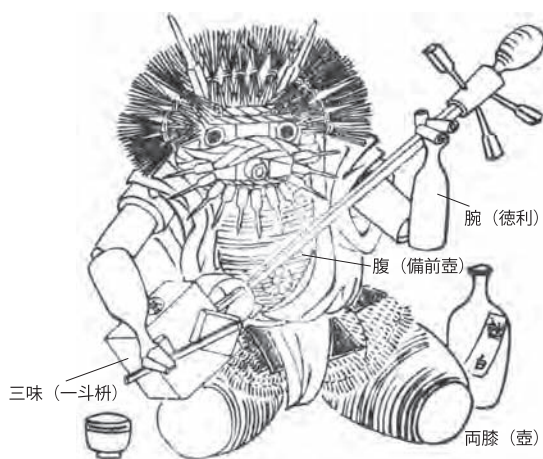
○棹 しゃくの三口の管

○転 手ねじ

○海老尾 きぎ徳利

○着もの 酒ふくろ

○ばち 五升



かたつむり

蝸牛

竹子笠

笠のひも白紺を混ぜ用いる

木賊 笠の枕



やなぎ

柳墓 農家道具一式

○枝 くわの柄

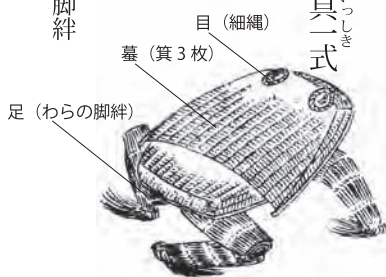
○幹 白

○葉 鎌刃

○墓 箕三枚

○目 細なわ

○四足 わらの脚絆



えび 赤貝

○ゑび 朱の太平

○かしら 大平の上二朱のさじ

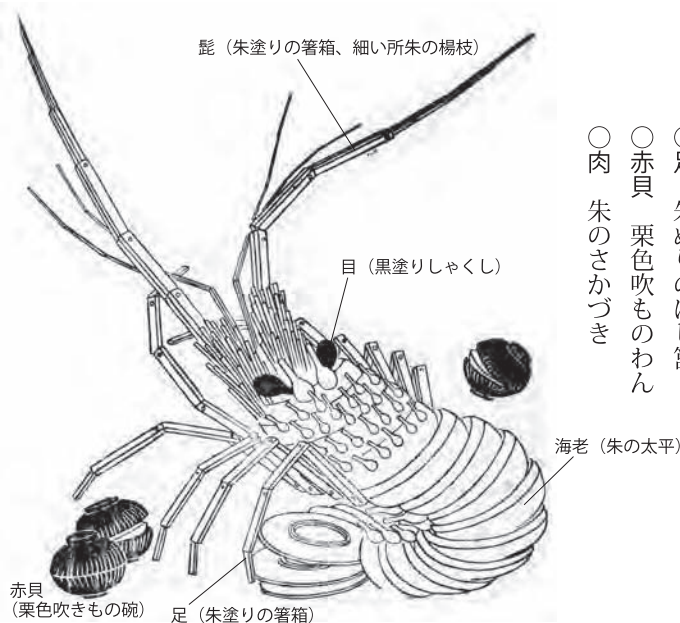
○髭 朱ぬりの箸箱 細き処朱のやうじ

○目 黒ぬりしやくし

○足 朱ぬりのはし管

○赤貝 栗色吹ものわん

○肉 朱のさかづき



べっふの文化財 No.43  
－浜脇薬師祭りの見立て細工－

平成25年3月29日

発行 別府市教育委員会  
編集 別府市教育委員会  
別府市文化財保護審議会  
印刷 株式会社プリメディア



